

西の都の背景

約 1300 年前、九州北部にある太宰府の町は、帝都に次ぐ行政・文化の中心地だった。遙か東方では、帝都が飛鳥から奈良、そして平安京へと数世紀にわたって変遷したが、太宰府は「西の都」としての役割を全うし続けた。

日本が朝鮮半島で敗戦を喫した 663 年頃から、九州北部は一地方の中心地から国家の重要拠点へと変わった。侵略を恐れた朝廷は、アジア大陸から来る船の主要な港である博多湾を守るため、一連の大規模な要塞の建設を命じた。侵略はなかったが、8 世紀初頭、新たに要塞化された南の山間盆地に大宰府が建設された。その配置は、中国唐王朝の都、長安の洗練された碁盤の目状の構造を模したものだ。長安を視察した遣唐使が帰国後、奈良の都の構想を練った。その後、彼は太宰府の都市も同じ方式で設計した。新しい都市が建設された当時、博多湾は既に何世紀にもわたって外国の文化や技術の玄関口となっていた。奈良時代（710-794）、この交流はピークに達し、太宰府は外国の要人、物資、文化的影響が日本に流れ込む玄関口となった。到着した外交官は、帝都でされるのと同様に豪華な迎賓館で迎えられた。また、太宰府には国の行政機関、役人向けの学校、皇族を祀った仏教寺院もあった。大宰府の広範な官僚機構は、九州の大部分における税金、経済、治安を管理していた。

1300 年前の都市にあったかつての行政庁舎、古寺、その他の遺構は、現在の太宰府市と筑紫野市、大野城市の至る所で見ることができ、この西の古都の記憶は今も息づいている。